参考資料4

令和５年度　第１回　自然再生専門家会議

令和５年度　自然再生専門家会議委員による

河北潟流域自然再生協議会 現地視察の開催について

令和５年１２月

開催趣旨

- 平成15年に自然再生の基本理念や手順等を定めた「自然再生推進法」が制定された。同法では、地域の多様な主体が参加した自然再生協議会を設立し、自主的かつ積極的な自然再生活動が推進されている。
- 自然再生協議会は、自然再生の内容及び計画を定めた自然再生事業実施計画（以下「事業実施計画」という。）を作成することとされており、作成後は速やかに国及び関係する都道府県に提出されることになっている。国は、提出された事業実施計画を調査して審査するとともに、自然再生専門家会議にかけて助言等の意見を聴かなければならないと定められている。

２００２年　「河北潟自然再生協議会」発足
２０２２年　「河北潟流域自然再生協議会　準備会」結成
→ 現在、全体構想や事業実施計画の検討が進められている。

河北潟流域自然再生協議会を対象とした、
事業実施計画の作成や今後の活動の参考となるような
助言を行うことを目的とした現地視察を実施

現地視察の開催概要

➢ 開催場所

石川県河北潟及び大野川流域（金沢市、かほく市、津幡町、内灘町）

➢ スケジュール

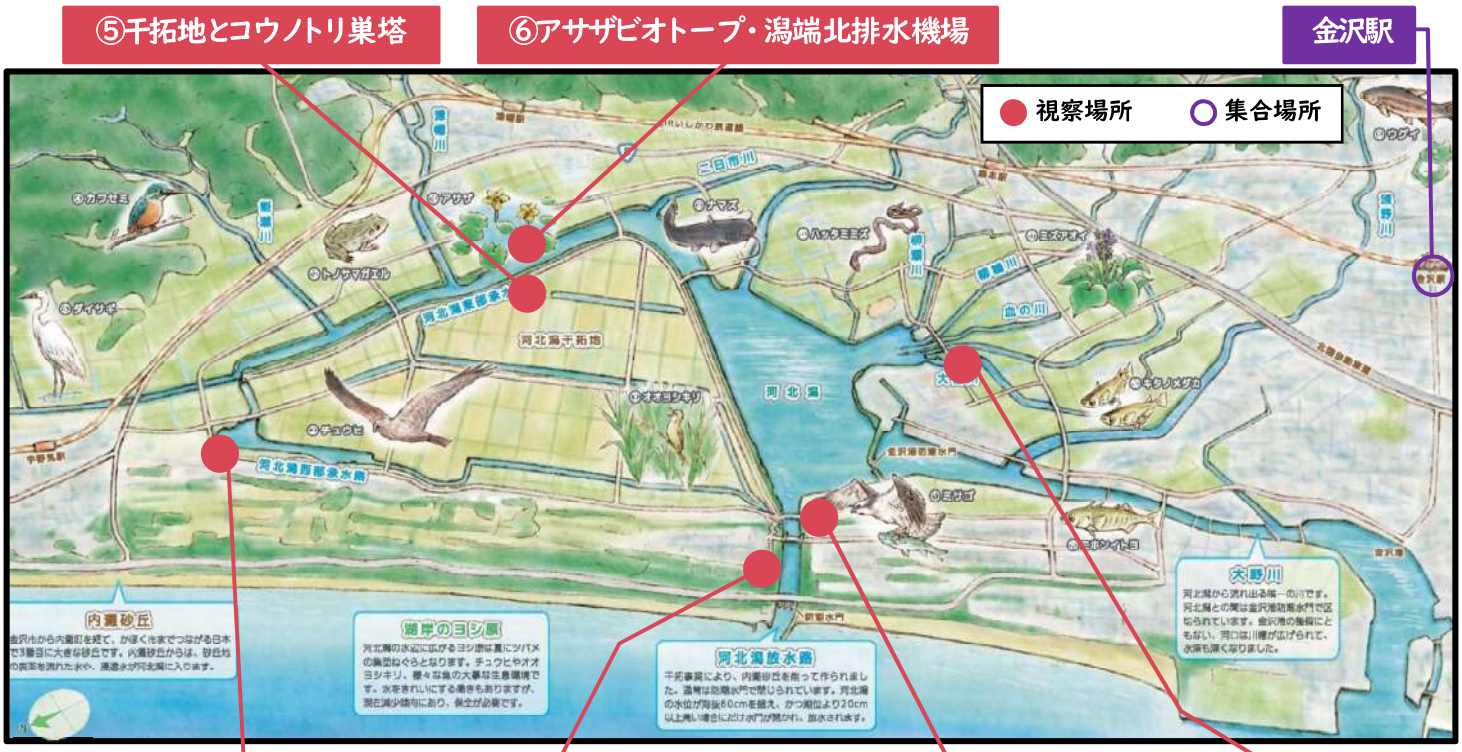
令和５年11月 15日（水）　現地視察
11月 16日（木）　現地視察に関する意見交換会

➢ 出席者

- 河北潟流域自然再生協議会 21名（他、関係者１名）
- 自然再生専門家会議委員 ５名
- 環境省 ４名

▲ 現地視察の様子

現地視察場所



（出典）NPO法人河北潟湖沼研究所（2020）「つながる河北潟　かほくがた流域地図」を一部改変

視察①　こなん水辺公園

➢ こなん水辺公園とは

- 「自然との共生」をテーマに掲げ、2002年に開設した。「こなん（湖南）」の名の通り、河北潟のすぐ南に位置し、園内には観察池や水路、田んぼ等の水辺が多くある。
- 当公園では、「河北潟自然再生まつり」等のイベントが開催されている。
- 昔、河北潟に流れ込む河川では、木舟が農作業や移動用に利用されており、刈り取られた稲等を運搬していた。そうした昔を模して河北潟に舟を浮かべようということになり、ヨシ原の保全管理で出るヨシの新たな活用方法として市民参加イベントでヨシ舟を製作している。そのヨシ舟が公園内に展示されている。

➢ 実施している活動の内容

- NPOより自然解説員の派遣（金沢市委託事業）
- 外来植物除去活動
- ヨシ刈りとヨシを利用したヨシ舟づくり

協議会による解説

ヨシ舟の見学

園内の案内看板

視察②　蓮湖渚（れんこなぎさ）公園

➢ 環境

- 河北潟に水門が設置されたり、護岸工事が行われることにより、護岸周辺が沈下してしまいヨシ原が減っている。
- 河北潟周辺では、チュウヒが生息している。オオヨシキリも見られているものの、近年ヨシ原の減少で巣作りの環境に適さなくなってきているためか、見かける頻度が減っている。

➢ 取組

- 現在も残っているヨシ原を大切にしたい想いもあり、「湖面利用ルール」を地域住民とともに作成した。このルールが作られたきっかけは、2000年頃、水上バイクやウェイクボードがブームとなったことも関係している。

協議会による解説

視察風景

河北潟の湖面利用ルール

視察③　眺望点・内灘運動公園展望台

➢ 内灘運動公園展望台について

- 公園内にある展望台から、河北潟干拓地の全体と防潮水門を眺めることができる。

➢ 課題

- 河北潟はかつて中～低塩性の汽水湖だった。干拓土地改良事業や金沢港港湾事業等により、海水が河北潟に流れ込まなくなった結果、水質に影響が及んでいる。一方で河北潟と日本海の間にある大野川は塩分濃度が海水並みに高くなっている。そのような状況の中、水質改善やシジミ等の回復に向けて、良好な汽水域を取り戻すことを考えている。潟の全てを汽水に戻すのではなく、一部を試験的に汽水域にしてみてはと考えている。

委員等による主な感想・意見（一部抜粋）

- 汽水化に関しては、外部から研究者を招いてシミュレーションをする事が必要だと思う。

視察風景

協議会による解説

協議会による解説

視察④　大崎の清水（しょうず）・宇ノ気水辺公園

➢ 経緯・環境

- かほく市大崎地区には砂丘を水源とする清水（しょうず）がある。かつては地域の人たちの重要な水源として、米をといだり、洗濯に使われていたが、水道の普及に伴い地域から忘れ去られ、いつしか草が繁茂して水辺が見えなくなっていた。
- 10数年前に大崎地区の自然観察会があり、この清水の存在を再発見したことを契機に、再度この水辺を使えるように整備しようとことになり、公民館等、住民による管理が実践されている。
- この水辺には、ホクリクヨコエビ、チョウセンコツブムシ、スジエビ、ウキゴリ等が生息している。
- 宇ノ気水辺公園は河北潟の残存水面で、唯一干拓前の河北潟の湖岸の名残を留めている。例年、カモ類等の野鳥が多く観察できる。

大崎の清水

宇ノ気水辺公園

野鳥観察の様子

視察⑤　干拓地とコウノトリ巣塔

➢ 当地域におけるコウノトリについて

- 干拓地には、コウノトリの巣塔が２本立っている。コウノトリが初めて飛来してきたのは、令和元年８月である。その後、例年見られるようになり、令和５年２月に巣塔で繁殖が確認された。
- 当地域で生息するコウノトリが何を捕食しているのか調査してみたところ、カメ、ザリガニ、バッタ等、様々であった。

➢ 取組

- 無農薬農法を取り入れた農業を、70～80haの規模で実施している。無農薬のため収穫量は通常の半分以下であるが、平均価格の２倍以上の価格で販売しており、リピーター（特に首都圏）の確保ができている。

協議会による解説

干拓地とコウノトリ巣塔

コウノトリ巣塔

視察⑥　アサザビオトープ・潟端北排水機場

➢ 潟端北排水機場

- 排水ポンプのスクリューにゴミ（大きいものでは冷蔵庫も）、ビニールヒモ、スズメノヒエ等が流れ込み、引っ掛かってしまうとポンプが停止してしまう。
- 協議会の一部であるNPO法人河北潟湖沼研究所へ相談したところ、スズメノヒエ等の除去作業を地元ボランティアで実施することとなった。

➢ アサザビオトープ

- 過去に、当地域にアサザが自生していたため、ビオトープが作られた。当時、ビオトープにはアサザは定着しなかったが、低位排水路にはアサザが繁茂するようになった。毎年大群落が発生していたが、数年前の増水時に大部分の群落が流される等で消失した。
- 今後、新しいビオトープ施設が整備される可能性があるため、思案している最中である。

土地改良区による解説

潟端北排水機場

集合写真

現地視察に関する意見交換会

➢ 委員等による感想・意見（一部抜粋）

- 水質の塩分濃度のデータを全体構想に記載すべきである。汽水化を考える上で避けては通れない必要な情報だと思われる。
- 河北潟でどのような種類の生物が、どれだけ生息しているのか分かるよう、全体構想等に記載すると良い。普通種の生息状況も重要な情報になりうると考えられる。
- 浚渫土砂を護岸に盛る事業でヨシ帯が再生できている事をお聞きした。該当する場所は、それほど浸食されていないという事なので、各地点の特性を知り、現状の条件でヨシ帯がどこに再生できるのかを検討するべきだと思う。
- 多くの関係者が協力し、ボトムアップで対応できる体制が整っている事が素晴らしい。他の再生事業では国が主導のケースが多く、一般市民を巻き込むことが上手くできていないという課題がある。
- 当協議会は多様な主体で構成されており、情報交換が難しいと思われるため、部会やＷＧ等、テーマごとに情報や意見を交換できる場をつくる事が重要だと思う。
- 自然再生の事業は日本では非常に新しいため、上手く合致するような行政の仕組みがあるわけではない。バックグラウンドが違う人達が話合いできる場を、より多く設ける事が大切だと思う。
- 企業や世間に関心を向けてもらうには、「自然共生サイト」という新しい取り組みがある。企業や世の中の関心を集めるという点では、自然共生サイトを目指すという事も一つの案だと思われる。

挨拶

意見交換会の様子

意見交換会の様子